

幸福の谷

ニュースレター

第7号



JICA パートナーシップ プロラム

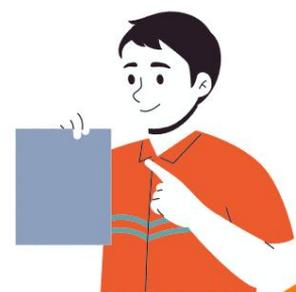
ブータン東部タシガン県における大学—社会連携による地域づくりに
関する人材育成開発支援事業」

GNH コミュニティ エンゲージメント センター



東南アジア地域研究研究所
Center for Southeast Asian Studies
Kyoto University

プロジェクトコーディネーターからの挨拶



私が初めてブータンを訪れたのは2012年でした。当時、特に東ブータンでは、2頭の牛を使って畑を耕す風景が一般的でした。私が生まれる前に、日本では牛を使った耕作はすでに姿を消していたので、その景色にとっても興奮したことを覚えています。幸いなことに、祖父母や先祖がどのように田畑を耕し、生き方（農業「文化」）を形成してきたかを、残された記録、道具（鋤など）、博物館や図書館の写真（さらには Web ページ）から、蓄積された知恵で知ることがどうにかできました。祖母からも詳しい話を聞くことができました。両親も知らない話がいくつかありました。私が祖母の話を聞いてから3年後、彼女は93歳で亡くなりました。第二次世界大戦後の急速な発展に伴う生活様式の急激な変化により、多くの記憶や知恵が人々の生活や心から失われましたが、日本にはそれらのいくつかを記録し、保存する時間が残されていました。一方で、過去数十年で急速に近代化が進んだブータンなどの国では、これらの文化は記録を残さずに大きな喪失の危機に瀕しています。2022年に再びブータンを訪れたとき、村には木製の鋤と牛がなくなり、代わりに耕うん機のエンジンの音が聞こえました。村人は2年前に耕うん機を導入したときに、木製の鋤が台所で薪になったと教えてくれました。

農業の在り方だけでなく、そこに暮らす人々の物語や生活に使われている物なども、代々受け継がれてきた文化や知恵、生き方を教えてください。これらの記録は「モノ」そのものと同様に、学術的な観点からだけでなく、コミュニティの将来の発展のために「アイデンティティ」と新しい価値を再発見するためにも重要です。「地域の文化（地域の知恵、地域の資源など）を活かす」ことは、日本の農村づくりの考え方と活動の重要な柱です。コミュニティツーリズムの資源としてだけでなく、地域の叡智と現代のテクノロジー（知）の融合が、持続可能な社会に向けた新たな発想や価値観のヒントにつながることもありました。現在のブータン人コミュニティではあまり認識されず、失われつつある（近い将来に失われる）文化は、直接的かつ即座に利益をもたらすわけではありませんが、将来のコミュニティと社会の発展に大きな可能性を秘めています。私たちのプロジェクト活動が、地域の文化（資源）の保全に貢献し、文化を次の世代に伝え、将来の世代のための地域開発の可能性をもっとしっかりと見据えていることを約束します。



プロジェクトコーディネーター
赤松芳郎





バルツァム・ネコール:バルツァム の文化的および自然的状況を体験する
アビ・チャンドラ・アチャリヤ (プロジェクト・オフィサー)

ゾンカの宗教施設への巡礼であるネコールは、多くのブータン人にとって重要な慣習です。2022年8月7日、地元の専門家であるケルザン・デワ (バルツァムのGup) 氏がガイドするネコール・ツアーが、タシガン・バルツァムで開催されました。日本人とブータン人のプロジェクトメンバー6名と、地元の1名がツアーに参加しました。

バルツァムゲウオグで最大の僧院であるチャドルラカンの近くに集まったので、私たちの一日は早く始まりました。そこでは、その日の地元のガイドであるケルザン氏が、ハイキングトレイルと、ツアーで遭遇するさまざまなランドマークの歴史について説明してくれました。



旅はケルザン氏が子供の頃に学んだ、チャドル・ラカンの上にあるラマゴエンパという古い家から始まりました。それから15-20分歩いて、ドルジ・ファモ・ドゥプチュ、通称バルツァム・ドゥプチュに着きました。時折水滴が落ちる鍾乳石のような石があります。ケルザン氏によると、たまたま浸し水（ドゥプチュ）を味わった人は誰でも業を清め、障害を取り除き、幸運をもたらすとされているそうです。また、近くの岩の崖の上に、グル・リンポシェに関連する山蜂の巣とネイ（精神的な場所/洞窟）を目撃することができました



ラマゴエンパ



ドルジ・ファモ・ドゥプチュ

次に私たちが訪れた重要な場所は、リディシリサと呼ばれる場所です。名前のリディシリサは現地の言葉で、「リディ」は風、「シリ」はリフレッシュ、「サ」は場所からきています。そのため、リディシリサはさわやかなそよ風で知られており、ハイカーの休憩に最適です。バルツァム県(タシガン州)とラムジャール県(タシヤンツェ県)の間の尾根にあります。ドゥプチュからリディシリサまで、バルツァムから約1時間かかりますが、アップダウンが少ないのでさほど難しくはなく、年齢を問わず登れます。ケルザン氏の話と素晴らしい景色も、途中で私たちを楽しませてくれました。リディシリサはハイカーに適した場所であるばかりでなく、地元住民にとっては宗教的にも歴史的にも重要な場所でもあります。多くの地元の人々がここに来て、祈りを捧げ、神からの祝福を求めます。故バルツァム・ラマ・ペマ・ワンチェンは周囲の山々や寺院に住んでいると信じられています。ラマ・ペマ・ワンチェンは地元で有名な偉大なラマであり、リディシリサは、彼がバルツァムで滞在して瞑想した場所です。ラマは自分の死が迫っていることを知り、その準備を始めました。彼は弟子たちに、自分の遺体をバルツァムに運び、リディシリサにあるストゥーパに安置するよう伝えました。彼は、彼の法系の所有者と上級弟子が、その後長年生きていくと信じていました。彼の教えは、この地域で何世代にもわたって栄えました。彼の死後、彼の遺骨は21世紀初めまでチンブーに安置されていましたが、その後、彼自身が指示した通りバルツァムに運ばれました。彼の遺骨が安置されているストゥーパは、リディシリサにあります。



ゾントウン村遠景



リディシリサにあるチョルテン

リディシリサで一時停止した後、地元の人々がトンジャと呼んでいる場所に向かって緩やかな坂を登りました。トンジャに向かう途中、数十年前に一時的なヘリポートだった平坦な広場を見つけることもできました。トンジャの丘の頂上に近づくと、景色はますます壮観になります。ヒマラヤの素晴らしい景色と心地よいそよ風を楽しみながら、トンジャで昼休みを取り、ランチと景色を楽しみました。これらのオープンスペース、ビューポイント、トレイルに、看板、ゴミ箱、トイレ、水などの基本的な設備が整っていれば、エコツーリズムやコミュニティツーリズムに最適な場所になると感じました。



写真: トンジャでランチ

トンジャから少し下ると、モンリンツォと呼ばれる小さな神聖な湖(池)があります。モンリンはバルツァムのモンリン・ジェポの名前に由来します。乾季にはほとんど湖の水がなくなります。しかし、民間伝承によると、湖には水がありますが、私たちはそれを見ることができません。功績(メリット)の多い人には水が見えると言われています。さらに、ケルザン氏は、2羽の大きな鳥が湖の近くに住んでいて、湖を守っているという伝説があると説明しました。



モンリンツォ湖

モンリンツォ湖を後にして下ると、タシャング村を見下ろす小さな丘の上に見事な チョルテンが立っていました。ケルザン氏は、かつてバルツァム レマ ペマ ワンチェン の弟子だった ツァムパトブゲイ に捧げられたチョルテンであることを教えてくださいました。このチョルテンの横には、再生ペットボトルで作られたマニ風車があり、風に乗って回転し、そよ風に祈りを運んでいます。ツアーは午前 10 時に始まり、午後 4 時にツアーの開始地点であるラマ ゴエンパに到着して終了しました。



ツァムパトブゲイに捧げられたチョルテン

一日のネコールツアーを終えるとバルツァムの緑豊かな地元/コミュニティリソースを思い出し、知識と経験を惜しみなく共有してくれたガイドのケルザン氏に感謝の気持ちでいっぱいになりました。ただし、環境への影響をできるだけ早く考慮することが重要です。この地域の自然の美しさを維持し、訪問者に良い体験をしてもらうためには、道に沿って適切な廃棄物管理施設と看板を設置することが重要です。あちこちにゴミが集っていたのを鮮明に覚えています。戦略的な場所に看板を配置することで、ハイキング コース、その歴史、およびハイカーが従わなければならない規則や規制に関する情報を提供します。これは、訪問者が安全かつ責任を持ってトレイルをナビゲートするのに役立ちます。それと同時に、自然環境と地域の歴史に対する認識と感謝を促進するのに 役立つと確信しています。

また、来訪者だけでなく、地元の若い世代も、自分たちの地域がどのような地域であるかを知ることができました。

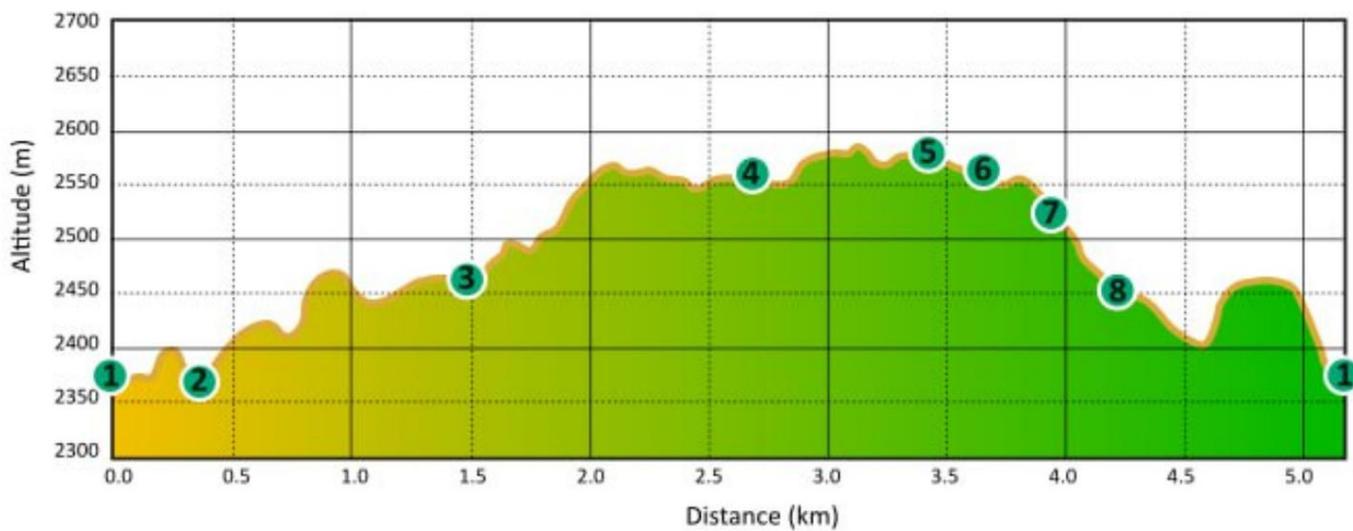
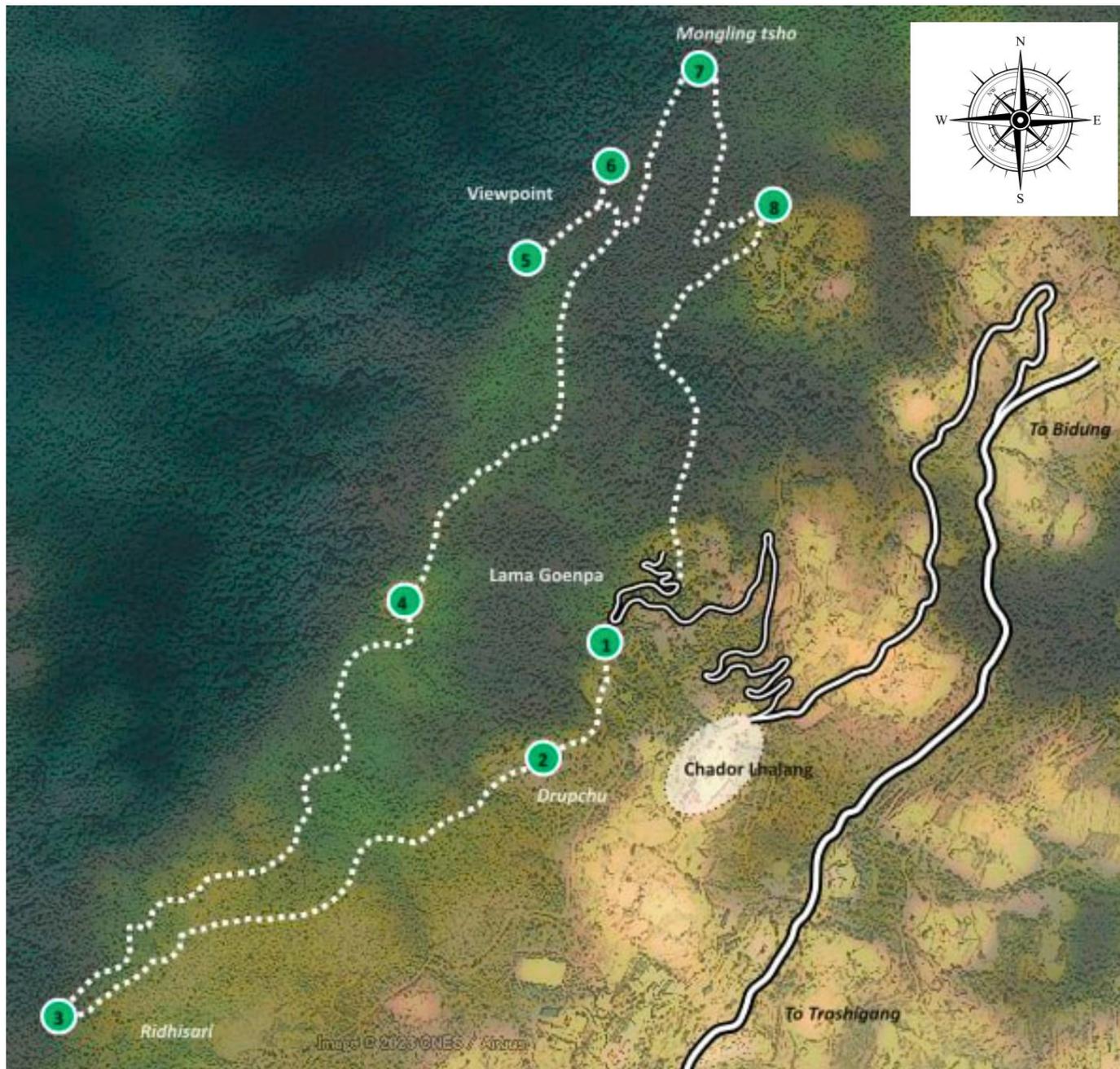


著者:

アビ チャンドラ アチャリヤ (AB パンダ)

プロジェクトオフィサー

バルツァム・ネコール・ツアー踏査図



フィールドレター：Choekorとその前の祝祭

石内良季（特任研究員、京都大学アジア・アフリカ地域研究大学院生）

2022年9月3日

夏が終わりに近づき、夜には上着が必要になると、バルツァムでは間違いなくこの地域で最も重要なフェスティバル、Choekor が開催されます。2022年9月、私はチャドル・ラカン近くのロペンの家に一泊し、翌日の早朝に前祭に出席しました。私は午前7時前に起床し、新しいチャドル・ラカンの1階でチョスパ（修道士）と一緒にバム（聖書）の朗読に参加しました。バムを読むスピードは人それぞれで、読み終わったのは午後4時頃でした。少し休憩した後、ミーチャムは旧チャドル・ラカンの内外で始まりました。ミーチャムは「ファイア マスク ダンス」と訳され、マスクダンサーが燃える松明を持って、ラカンの周りを時計回りに踊り、次に広場で踊ります。火は障害物を浄化し、追い出すと信じられています。



ミーチャム

この時、バルツァム中から多くの男性がすでにラカンに集まっており、ミーチャムが終わるとすぐにゲッティが始まりました。ゲッティはチャンラ語の「kon ge may (追い払う)」に由来し、dhon (幽霊)、gek (精霊)、jungpo (死者の魂) などの悪霊を村の家から追い払うために行われます。

ゾントウンとムクタンカル地域で話されている地方語であるチョチャンガチャでは、ハウラと呼ばれます。急いでゴ（平時に着る男性用民族衣装）から豪華な服装に着替えて、車でゾントウンに向かいました。ハウラの間、私たちは各家を訪れ、ラマは家中にドルナ（米とトウモロコシの混合物）を振りかけます。男たちは叫んでレンモン（シンバル）を叩き、たいまつに粉をまぶして火花を散らします。ゾントウンで最も低い家に行き、午後2時頃にミームの家で夕食をとりました。

歓声と行進のグループについていくのはとても楽しかったのですが、大雨の中、衣服がびしょ濡れで帰宅するのは大変でした。すべての家庭を訪問するのが原則であると彼らは言いましたが、空き家が増えた今は、おそらく以前ほど難しくはないでしょう。人口流出は、これらの地域にも影響を与えている可能性があります。

2022年9月4日

午前中は家で洗濯をして、午後はチャドル・ラカンに行って、トルド・チャムを見ました。このチャムの特徴は、ガルパに扮した二人の僧侶マーペンが踊るシーンにあります。このシーンはまるでドラマのようで、観客は笑ったり叫んだりしました。チャムはトルマが火の中に投げ込まれるシーンで終わります。トルドの「トル」も「ド」も「まき散らす」という意味です。



マーペン

2022年9月5日

これはChoekorでの最初の日でした。朝早、チャドル・ラカンに向かいました。朝から激しい雨が降っていましたが、午前10時頃にChoekorがスタートする頃には雨もやみ、気持ちの良い天気になりました。古いチャドル・ラカンでの早朝のスーカ（祈りの捧げ物）は、よい効果をもたらしたようです。多くの村人、特に若者や学生が新しいチャドル・ラカンの前に早朝から経典を手に集まりました。Choekorの単語「Choe」は「法、宗教、聖典」を意味し、「Kor」は「円、丸」を意味します。名前が示すように、Choekorは、人々が神聖な仏典を肩に担ぎ、コミュニティを歩き回るイベントです。人々によって運ばれる神聖な仏教の経典は、Kanjur、Bum、およびJa Tongpaです。Choekorを行う理由はいくつかありますが、主な理由は豊作（雨をもたらす）と人々の健康を祈願するためです。チョーとテンはバルツァムを旅し、どこへ行っても幸運を授けてくれます。



チェ・ジュ・カーン

この日は、大雨はやんだものの、路面は雨でぬかるんでおり、コンディションは良くなかったと言わざるを得ません。チョーに比べて人の家に行く機会が多く、食事やお茶、お酒を飲む機会が多かったテンと一緒に過ごした3日間でした。お赤飯や牛皮など、チョーコールで出される食事は格別です。村のお年寄りに話を聞くと、以前は米ではなくカーン（トウモロコシの粒）がメインだったそうです。休憩所ではお茶やヌードルスープなどのサービスのみとのことです。現在は昼食が提供されていますが、以前はチャンジャンマニでは、テンマ（トウモロコシを叩いたもの）だけでした。

歩くのも大変ですが、飲み食いを強いられるのも大変です。初日、私たちはタシヤンを経由してバイナンカルナクツァンまで歩きました。そこでは、チョーの運搬人が祭壇に設置されたプラットフォームでチョーを保持し、暗くなる前に自宅に戻りました。私もその日は疲れ果てて家に帰りました。タシヤンに向かう途中、一緒にいたミームが言いました。「タシガンの上のMongling Jepoの僧院で、Mongling JepoはChoekorの間に歌いました。Choekorの間はMongling Jepoの休日のようなものです。彼はこれらの日を祝います。」Choekorはバルツァムの特別なイベントであり、地元の神々も喜びを表現しています。

2022年9月6日。

Choekorでの2日目。8時30分スタートでしたが、家から歩いていたので5分遅れました。Choekorの列はすでに進行中でした。列の先頭にいるジャリンパ、ルモンパ、グパの楽器の音が聞こえたので、どこにいるのかすぐにわかりました。今朝も大雨でしばらく心配していましたが、昨日と同じようにすぐに止まりました。日中は雲が切れて日差しが照りつけたので暑く、路面状況の悪さに加えて昨日よりもキツく感じました。しかし、クムンの緑の田んぼを歩いているとやがて苦労はなくなり、景色の美しさを楽しんでいました。私の後ろについてきた生徒たちは歌を歌っていました。



野原を歩くチェ・ジュ・カーン



野原を歩くチェ・ジュ・カーン

その後、最終地点に到着する直前に、あるジンダの家の入り口で足を蜂に2回刺され、一瞬の痛みがありました。私は非常に不安でしたが、友人から、これらのハチ刺されは一般的であり、私には何も起こらないので心配する必要はないと言われました。テンが訪れるジンダの家では、テンと僧侶を歓迎するために、チョークの供物と食事が事前に準備されています。僧侶がジンダの家や各集落の共同寺院でスクハを行い、その後、全員が円陣を組んで歌と踊りを披露します。最後にジンダは、テンからワンを受け取ります。このようにして、テンのグループは各ジンダの家とツォカンを回り、チェのグループよりも遅く最終目的地に到着しました。この夜、私はヤンカルにあるメメの家に泊まらせてもらいました。

2022年9月7日。

早朝6時頃、昨日到着したナンカルの家に向かいました。今日は天気が良く、朝から雨が降っていませんでした。この日が最終日ということもあり、多くの人がチョーを引き取ろうと集まっており、家から持ち出されたチョーを奪おうとする人々が殺到しました。ジンダのメメの家でアラ（地元の焼酎）を2杯出されて、しばらくは悩んでいたのですが、今回バルツァムに来てから、お酒に寛容になったのでしょうか。私は嬉しくなりました。ナンカルからゾントゥンまでの道のりは長く、（アラのせいで）テンに遅れて出発したので、急いでとても疲れました。私がチャンジャンマンに着くと、バルツァムだけでなく、近隣のラムジャルなどからも人が来ていました。



チャン・ジャン・マニ

今年はメメヨンバとして知られるモンリンジェポの付き添い（モンリンジェポのチャージュカーン）がいなかったため、通常チャンジャンマニで開催されるチャムはありませんでした。それにもかかわらず、ジャンジャンマニでは悪霊を追い払うためにチャムチェと呼ばれる儀式が行われました。

バルツァム・セントラル・スクールを通り過ぎ、チャドル・ラカンが見えてきたとき、やっとここまで来れたという達成感がありました。疲れがほとんど感じられなかったのは私だけではなく、3日間のイベントに参加した全員が同じ気持ちだったに違いありません。その夜、チャドル・ラカン前の広場では、3日間の締めくくりを盛大に祝うかのように、歌と踊りが夜遅くまで続きました。



チャドル・ラカン

Choekorやその他の儀式や祭りは、コミュニティの維持に密接に関連しています。これらの儀式は、地域の独自の文化と歴史を確認し、共有するという点で、コミュニティを維持する上で重要な役割を果たします。とはいえ、バルツァムはブータンの中でも移住率が高く、空き家が多い地域の一つであり、今後もChoekorのような大規模なイベントが開催されるかどうかは不明です。いずれにせよ、研究者や自治体がコミュニティの維持や地域の活性化を目指し続けるのであれば、人と人とのつながりが生まれ、維持されるChoekorのようなお祭りについては、詳細に検討する必要があります。



石内良季
(特任研究員)

私のコミュニティ・トレイル・プロジェクトの進捗状況

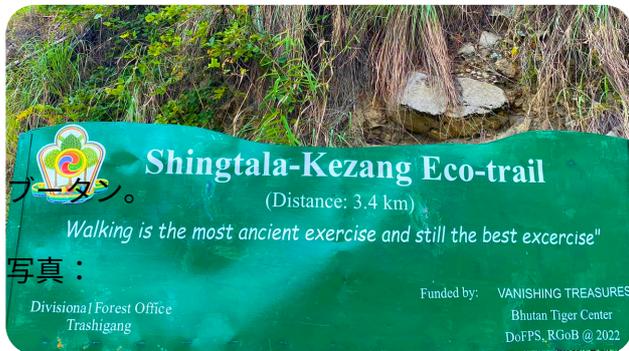
菊川翔太（特別研究員、京都大学アジア・アフリカ地域大学院生）

クズザンポラ。日本出身の修士課程の菊川翔太です。このJICAパートナーシップを通じてバルツァムの古いトレイルを改修して活用しようとしています。私はこのトレイルプロジェクトに携わっています。ブータンのトレイルに感動したからです。ここでは、なぜ興味を持ったのか、何をしたいのかを書きたいと思います

シンタラ・ケザン・エコトレイル

去年の9月、私はバルツァムに3週間滞在しました。滞在の終わり近く、私は緊張していました。私はシャルチョパ語を話すことができず、このJICAプロジェクトに何も貢献できませんでした。私は自分の失敗で、メンバーに迷惑をかけました。正直、日本に帰りたかったです。そんなある日、タシガンに市場調査に行った時、タシガン裁判所の近くにトレイルを1つを見つけました。その名は「サムカル村へのシンタラ・ケザン・エコトレイル」した。私は、一人でトレイルに向かいました。スタートから3分後、いきなり綺麗な鳥瞰図、学校や病院、ゾンの景色など、タシガンの町の風景が現れました。さらに進むと、ダーシングやルンタなどの宗教的モニュメントがあり、そして木々や草木、鳥のさえずりなど豊かな自然が迎えてくれました。

この道を歩きながら、自分の日常を振り返ることができました。私はここに来て、ここにとどまることができて、幸運だと感じました



トレイルの出発点



トレイルの途中



タシガンの街の鳥瞰



道中にあるダーシング

日本でのプレゼンテーション

昨年の10月、私は日本に戻ってきました。トレイルでの経験を次のステージに進める方法を知りたかったのです。そこで、あるエコツーリズムに関するシンポジウムで発表を申し込みました。100人を超える聴衆がありました。発表後、多くのコメントやアドバイスをいただくことができました。

「このトレイルは地域社会にどのように貢献していますか?」「未来への道を維持するための、持続可能な方法とは?」「ブータンのトレイルはとても魅力的です」。日本人はブータンとその観光に、特別な感情を持っていると感じました。ブータンのトレイルについて、もっと学びたいという気持ちになりました。



写真: 日本学生エコツーリズムシンポジウムでの発表

タシガン森林局の CFO へのインタビュー

昨年の2月、私は再びブータンに戻ってきました。幸運なことに、タシガン森林局の CFO に会い、シンタラ ケザン エコトレイルについてインタビューすることができました。オフィスでは、彼と彼のスタッフが私たちの試みに対して、親切に答えてくれました。彼らとのインタビューはとても興味深いものでした。

その中から、2点ピックアップしました。まず、このシンタラ ケザン トレイルには、タシガンの住民とサムカルの村人の両方に多くのメリットがあります。タシガンの住民には、ハイキングや余暇のスペースを提供しています。サムカルの村人にとっては、タシガン町まで野菜を売りに来たり、病院に行ったりする際の近道となります。このエコトレイルは、タシガンの住民とサムカルの村人の GNH に貢献する場所として、大いに興味が湧きました。

2つ目は、昨年10月4日に実施されたウォーク・フォー・ヘルス・プログラムについてです。120人以上の公務員がプログラムに参加し、サムカル村への道を歩きました。ゴール地点では、病院スタッフが健康診断を行いました。このトレイル プロジェクトは、農業、文化、健康の各部門が協力している、非常に良い例だと思いました。



ウォーク・フォー・ヘルス・プログラム



ウォーク・フォー・ヘルス・プログラム



ウォーク・フォー・ヘルス・プログラム



ウォーク・フォー・ヘルス・プログラム



ウォーク・フォー・ヘルス・プログラム



タシガン森林局 CFO へのインタビュー

皆さんへのメッセージ

3月にまた日本に戻ってきて、今このエッセイを書いています。最後に、このトレイルプロジェクトを通じて、皆さんと一緒にやりたいことを共有したいと思います。

・シエラブッチェ生と。バルツァムにはチャドル・ラカンだけでなく、多くの貴重な宗教的モニュメントがあり、その中には保存状態が良くないものもあります。しかし、そのような地域の宝を保存することは、私たちと将来の世代にとっても不可欠であると私は信じています。では、歴史的建造物を調査して記録に残しましょうか。それらをつなげて、看板と地図をトレイルルートに設定してみませんか？ 地域社会でフィールドワークをすることは刺激的であり、あなたの研究にも貢献します。

・バルツァム中央学校の校長/教師/生徒と。幼い頃から地元の歴史と宗教を学ぶことは、彼ら自身のアイデンティティと興味を育む上で不可欠であると私は信じています。では、遠足のために学校のカリキュラムを使って、あなたたちも協力していただけませんか？ このトレイルへの遠足は、学生のチームワークを構築し、バルツァムへの愛着も高めます。

・バルツァムの Gup (村長) /住んでいるみなさんと。バルツァムは、宗教的にブータンで非常に重要な場所だと思います。そして、そのような地元の宝物は、将来的にも教育、Nekor,および観光に非常に有益です。では、それをどのように維持・活用していくのか、一緒に考えていきませんか？

・シンタラ ケザン エコトレイル プロジェクトと。シンタラ・ケザン・エコ・トレイル・プロジェクトは、ブータン・トレイルの先例であり、先駆的なプロジェクトの1つだと思います。そのため、地元のグループがどのようにトレイルを維持しているか、可能であれば皆さんがどう協力しているかなど、プロジェクトについて詳しく知りたいと思います。

このプロジェクトの実現には多くの困難があると思います。しかし、これは単なる文化の保存ではなく、コミュニティにとって重要なことです。最近、多くの若いブータン人が、都市や海外に移住しています。地域に触れ、愛着を深めることができる場と時間があれば、将来、故郷に戻ったり貢献したりするための、一つのエネルギーになると思います。とにかく、このプロジェクトへのすべてのサポートに感謝します。私は本当に幸せで、あなた方のすべての努力に感謝します。



著者:
菊川翔太
プロジェクトメンバー

農村部の日本人大学生によるブータン展

森下航平 京都大学大学院1年

日本では、アーティストだけでなく地域住民も参加して一緒に制作するアートイベントを「アートプロジェクト」と呼んでいます。これらの活動は、2000年代以降、日本の地方で急速に広がっています。観光客だけでなく、地元の人々が自分たちの郷土文化の価値を再発見し、プロのアーティストと一緒に楽しむことで、地方の新たなまちづくりとして注目されています。特に香川県直島のアートプロジェクトは有名で、島内各地で個性豊かな現代アートが展示され、多くの観光客を惹きつけ、島の発展と活性化に貢献しています。



ブータン展の説明パネル作り



ブータン展のスペース配置

京都府宮津市では、少子化で廃校になった小学校の校舎を活用したアートプロジェクトが開かれています。「Museum in the School」は、2019年から開催しているイベントで、芸術家や美術鑑賞家である地域住民が中心となって行う、アートプロジェクトです。宮津市とその周辺に住むアーティストの絵画、陶磁器、写真、衣料品などの作品が展示されています。また、伝統芸能の公演や絵画教室、来場者参加型のワークショップも開催しています。「学校の美術館」は、地域の人々が質の高いアートを楽しむ貴重な機会となっているほか、地域外からも多くの人々が訪れる、魅力的な場所となっています。



ブータン展を楽しむ来場者



展示ギャラリーの準備



来場者へ説明する学生

2022年度「Museum in the School」に向け、京都大学チームは企画展「ブータン展」を開催しました。宮津市では、京都大学の教職員や学生が地元の子どもたちへの自然体験教育など、地域の関係者とともに、5年前から地域活動に取り組んできました。また、京都大学のメンバーは、ブータンの研究者や学生と一緒に宮津市を訪れ、農村問題について一緒に学びました。2022年の「ブータン展」は、ブータンとブータンの農村問題を、より多くの地元の人々に知ってもらおうという観点から開催されました。



ブータン人と来場者のオンラインでの会話



ブータンでの学生交換プログラムの説明



収集したアイテムの展示

展示会では、ブータンの民芸品や写真が展示され、ブータンの自然や社会、文化がプレゼンテーションパネルで紹介されました。展示に合わせて、来場者が民族衣装を試着できるイベントや、ブータン人と来場者とのオンライン会話会も行われました。また、ブータンはGNHに基づいた「幸せな国」を目指していることも説明しました。ブータンのGNH調査で使われた質問を記入し、質問に答えてもらうアンケートボードを作り、来場者に、ブータンのGNHやGNHに関する取り組みへの理解を深めてもらい、幸せについて考えてもらいました。



フォートギャラリー



展示会場



トウ製品の展示

初めて見るブータンの民芸品や民族衣装に興味を持ち、来場者は展示スタッフに、ブータンの社会や生活について多くの質問をしました。オンライン会話では、来場者とブータンの人々の間で、幸せを感じた瞬間についての話がされたりしました。この展覧会をきっかけに、ブータンに興味を持ったという来場者もあり、ブータンを訪問したいという希望を表明した人もいました。ブータンのことを「幸せの国」として知っている人が多いことに驚きました。

また、何人かの来場者は、田舎の村からの人口の流出と放棄された農地の増加を見て驚いたと述べていました。ブータンの農地を調査し、これらの問題が日本の村にも共通していることを、改めて認識しました。この展覧会を通じて、日本の地元の人々が新しい文化を楽しんだり、ブータンと日本の相互理解に貢献したことを望んでいます。



森下航平
京都大学大学院一年生

ご閲読ありがとうございました

幸福の谷

第7号

2023年4月

編集：Abi Chandra Acharya（AB Panda）プロジェクト オフィサー

全著作権所有。このニュースレターのいかなる部分も、発行者の許可なしに、いかなる形式でも複製することはできません。



JICA パートナーシップ プログラム
「ブータン国東部タシガンに県おける大学—社会連携による地域づくりに関する
人材育成開発支援」

